

CAGLIERO¹¹

カリエロ11



第7号

～ サレジオ会宣教ニュース ～

2009年7月11日

サレジオのミッションにたずさわる会員、若者への宣教師、友人の皆さん！

7月、8月の間、多くの管区は夏休みに入り、学校の合宿、信仰体験、楽しいひとときをすごし、宣教の体験をすることもあります。さまざまな形での宣教ボランティア運動は、いまや多くの管区で青少年司牧の一環として行われています。

ラテン・アメリカやアジアで、いくつかの宣教グループが活動しています。そのメンバーは毎週、あるいは毎月、司祭たちが回りきれないその地域の村々で、宣教活動にたずさわっています。

ラテン・アメリカの宣教グループは、典礼の特別な時期に（聖週間、クリスマス）、大都市のスラムや、アマゾン地方の先住民族の中に入り、福音を告げる活動を行っています。ヨーロッパや東アジアのいくつかの管区では、学年度の間ひと月かけて準備し、それから三週間、宣教を体験する活動を若者に提供しています。

また、エクアドルなどラテン・アメリカのいくつかの管区で、若いボランティア宣教師たちが自国で宣教の体験をしています。毎年、200名ほどの若者が、国内のさまざまな地方、アマゾンの密林、コルディジェラの人々の中で、海岸地方や、ストリート・チルドレンの中で、一年にわたって働きます。この若者たちは、サレジオ会員と生活を共にします。ほかの管区も、ボランティアを海外に派遣しています。

特定の開発プロジェクトのために専門的スキルを提供するボランティアの体験についても、私たちは知っています（スペインのJTM、イタリアのVIS、ベルギーのCOMIDEなど）。

宣教を使命として掲げ、宣教師として約束を立てた夫婦やその他、信徒のメンバーを、数年間、あるいは場合によっては生涯にわたり宣教地に派遣するサレジオ家族のグループもあります。

このように、さまざまな宣教ボランティア活動があります。大切なのは、事前の、活動中の、そして事後の養成カリキュラムです。若者の宣教への養成が、皆さんの管区でも行われていることを願っています。2011年には、南米大陸の体験に全サレジオ家族の目が向けられることを願い、宣教の日のテーマを「若い宣教師を養成する」にしたいと考えています。

皆さんが、宣教師ドン・ボスコの心をもって、若者たちのそばで、豊かな使徒的実りを得られますように。

宣教顧問 ヴァツラフ・クレメンテ神父

本号の内容

- ・ 宣教顧問より
- ・ 2009年7月
サレジオ会の宣教の意向
- ・ 若者からもらった
いちばん美しい贈りもの
- ・ イスラム教徒の中で働く宣教師

2009年7月 サレジオ会の宣教の意向

《北アフリカ諸国で働く若い会員たちが、キリスト者としての信仰を喜びと熱意をもってあかしする忍耐と勇気を、日々、見いだしますように。》

30名ほどの会員が、モロッコ、チュニジア、リビア、エジプトの北アフリカ諸国に暮らし、働いています。特に生徒のほとんど全員がイスラム教徒の学校で教育に取り組み、また数少ない外国人カトリック信徒に司牧の奉仕を提供しています。日々の奉仕を無償で捧げる彼らの存在は非常に意味深いものです。

若者からもらったいちばん美しい贈りもの

2007年、アメリカ、ベルフラワー市の聖ドメニコ・サヴィオ教会で、エクアドルの孤児たちのために働きたいという意志を初めて表明したときのことを思い出します。今、そのグアヤキルに来て8か月が過ぎ、人生の中で情熱を注げるものを見つけたと思っています。私の人生における大切な出来事を選ぶとしたら、この体験を選びます。

この体験は、私の世界観を変えました。貧困、飢え、発展途上国に見られる状況に目を見開かされ、より良い者になりたいという気持ち呼び覚ましてくれました。

初めは、家族や友人から遠く離れた見知らぬ国に行くのはとても不安でした。でも子どもたちを見たら、すべての躊躇は消えてしまいました。人生を変える経験になると人から言われても信じられなかったし、どれほどその言葉が真実か知るよしもありませんでした。無邪気な子どもが路上で寝ているのを見れば人生は変わってしまうし、その子どもが自分と一緒にオラトリオに戻ることを決心すれば、それは祝福の体験になります。ヴィンス君やエリックを連れて来たというだけでなく、神様を連れて来た、と感じるのです！

ここで過ごす毎日が、神様からの贈りものです。神への愛とは何なのか理解するのを助けてくれる日々に、感謝しきれないほどです。ここで学んだいちばん大切なことは、自分の持っているもの、それが靴や、お椀一杯のご飯であれ、自分の親であれ、確かなものだと思込んではいけないということです。残念ながら私は、こういったものすべてが確かなものだと思っていました。一年前、私の人生は下り坂を落ちていました。学校にも仕事にも、やりがいを見いだせずしていました。今、人生への新しい展望をもって、人を助けることを続けたいという新たな望みと動機を胸に、エクアドルを後にしようとしています。私の心の中で大きくなっているこの新しい動機は、子どもたちからもらうことのできた最良の贈りもので、お金では決して買えないものです。

それで、私は10年後の自分をどのように思い描いているのでしょうか？ 社会に何かを与え、人を助けることのできる自分です。働く場はエクアドルではないかもしれませんが、希望しているのは消防士として働くことです！

私のために祈り、この歩みを通して私のことを信じてくれたサレジオ会のブラザーや神父様たち皆に感謝します。彼らによって私は今の自分になるために助けられました。

ジョン・ガルシア 18歳

イスラム教徒の中で働く宣教師



ヴァツラフ・クレメンテ神父と西ヨーロッパ地域顧問
ホセ・ミゲル・ヌエス神父、モロッコの職業訓練センター
「アッサビル」の若者たちと。

私たちがここにいるのは、私たちが宣教師だからです。分かち合うべき信仰、知らせるべき福音があるからです。私たちの使命は、何よりも証しであり、私たちが生き活きと生かす信仰、私たちを支える希望、私たちが神から受け、すべての人と分かち合いたいと望む愛の証しです。

キリスト教徒も、改宗者も少ないからといって、私個人としては挫折感を抱いてはいません。私たちは「刈り取る」ためではなく、「種を蒔く」ためにここにいると私は確信しています。祈りを通して、私たちの学校での教育を通して、あるいは病院や診療所での私たちの存在を通して種を蒔きます……ここに暮らす人々と人生・生活を分かち合うことによって。

宣教の働きは、秘跡を受ける人の数や、ほかの同じような数値で計れるものではありません。神だけ

がそれを計ることができ、いつの日か私たちにおっしゃることができるでしょう。「私は希望に飢え、兄弟愛に満ちた社会、友情、愛、福音、神に飢えていた……そしてあなたが私のところに来てくれた……」するとある人は言うでしょう。「いつあなたに希望を差し上げたでしょうか。いつ慈しみ深い“みことば”をかけ、愛であられるという神の真理についてお話したでしょうか。より兄弟愛に満ちた社会への希望をもつように、いつあなたを助けたでしょうか。」そのとき、イエスは私たちに言われるでしょう。「この小さな者たち、この苦難の地に暮らす人々に行ったことは、私にしてくれたのだ。」だから私は思うのです。ここで働く司教や司祭は、大きな司牧の働きができないからといって、迷いを感じることはありません。彼らは証しするように、生活や活動を通して、すべての人を照らすあの光を反映させるように呼ばれているのです。……

大切なのは実りを集めることではなく、いつの日か実る福音の種を蒔くことです。……宣教は、イスラムの国にあっても“宣教”です。私たち宣教師は、私たちの働きに意味があり、この世というパンのパン種であることを理解し信じるために、それを見つめる信仰の眼鏡を必要としているのです。

ジブチ教区 ジョルジュ・ベルタン司教
(Popoli e Missione 誌、2009年3月号、p.52-53より)